

## 現地校交流を充実させるための授業の工夫 —「スペイン語の壁」を乗り越えて—

前サンホセ日本人学校 教諭

北海道釧路市立景雲中学校 教諭 所 桂太郎

**キーワード** 在外教育施設、コスタリカ、現地校交流、言語、授業の工夫

赴任校の概要（2025年8月8日現在）

サンホセ日本人学校

La Escuela Japonesa de San Jose

URL：http://www.escuelaj.com/

児童生徒数：小学部8人 中学部1人

### 1 はじめに

国内では新型コロナの影響がまだまだ色濃く残る令和4年4月、私は中南米の国コスタリカに派遣された。日本に比べ、コスタリカでは早くから日常を取り戻しつつあり、日本同様、私たち派遣教員の当面の課題は、コロナ禍で中止になっていた行事を再開させることであった。「現地校交流（以後、交流）」もその中の1つである。ここでは、交流をより充実したものにするための授業における工夫を紹介していきたい。

### 2 コスタリカ・サンホセ日本人学校について

コスタリカは、東西を太平洋とカリブ海に囲まれた自然豊かな国であり、地球上の全動植物の4%が生息されている。特に鳥類は、その数が豊富で手塚治虫氏の「火の鳥」のモデルとなった幻の鳥ケツァールや、色彩豊かな大きなくちばしが特徴的なトゥカーン、色鮮やかで輝くような羽を持つコンゴウインコ、高速の羽ばたきでホバリングをしながら蜜を吸うハチドリなど様々な鳥たちに会うことができる。また、1949年に軍隊の廃止を宣言し、これまで軍隊に費やしてきた国家予算を教育や環境のために振り分けたことで、国民の幸福度が高い国としても知られている。

サンホセ日本人学校は、1974年に開校し、昨年（令和6年）創立50周年を迎えた歴史ある学校である。児童生徒数は、ピーク時は70人を越えた時期もあったが、その後減少を続け、令和7年8月現在で9名の在籍となっており、学年によっては欠学やクラスメイトのいない学年もある。授業での交流活動が活性化されない、あるいは交流活動自体できない学級もあるため、そのデメリットを解消するために、帰りの会は講堂に集まって全校児童生徒で行い、授業の成果等を発表する場を設けている。また、近隣の現地校との交流や、ZoomやMeetを活用した遠隔合同授業などを積極的に実施している。



全校帰りの会での発表

### 3 交流に向けて

サンホセ日本人学校では、これまで現地理解教育の一環として、近隣校である「サン・アンソニースクール」との交流を継続してきたが、コロナ禍による自粛により、私たちが派遣された年、職員全てが過去の交流の状況を知らないままでのスタートであった。この再開を機にこれまで長年に渡り実施してきた「インターナショナルデー」（現地校の児童生徒を本校に招き、日本文化や日本の遊びを紹介して交流するイベント）から「授業交流」と形態を変え、実施することとなった。令和4年度には音楽、令和5年度には体育、令和6年度には書写で交流を行った。ここでは、体育の授業をまとめることとする。

### 4 交流の実際

#### (1) 言葉の壁

交流を行う上で最も障壁となるのは、やはり「言葉の壁」であると考え。コスタリカの公用語は、日本の義務教育では学ぶ機会が無いスペイン語である。公用語であるスペイン語を使って交流を進めるため、コミュニケーションが取りにくい環境の中で交流を行うことは子どもたちにとって大きな不安材料であった。中には英語を使ってコミュニケーションをとれる児童生徒もいるが、ごくわずかである。そして、その不安は現地校の子どもたちにも同様に伝わり、交流自体が充実したものにならないことも考えられた。

そこで、私は以下のような工夫で交流を行った。

#### (2) 授業の工夫

##### ① 題材の工夫

交流の題材に「ダンス（よさこいソーラン）」を採用した。理由は、第一にラテン系の人種で陽気なコスタリカの人たちは、大人も子どもも踊りが大好きであり、初めての交流でもすぐに馴染むことができると考えたためである。また、日本人学校では学習発表会で「よさこいソーラン」に取り組んでいるため、子どもたち同士で教えあいができるだろうと考えたからである。そして、子どもたちを通じて現地の人たちに日本の踊りを体験してもらい、日本の文化として伝えたいという思いがあったからである。

##### ② バディシステムの採用

バディとは「2人以上が組んでいるときの仲間」という意味で、スキューバダイビング等で使われるお互いを助け合うパートナーのことである。特定の仲間だけではなく、多くの仲間と触れ合うことができるのもこのシステムのメリットであり、サンホセ日本人学校の日常の体育授業でも毎回組むバディを変えるような仕組みで授業を行っていた。今回の交流においてもこのシステムを採用し、自分のバディに責任をもって踊りを教えることを求めた。バディは事前に同学年の児童生徒同士で組んでおいた。

##### ③ 縦割りチーム

スペイン語を学び始めたばかりの小学校1年生や転入生にとっては1から10までをスペイン語を使って説明するのは相当難しい。そこで、縦割りのチームを4チーム作り、チーム内で協力しながら教えることができるようにした。バディ同士で教え合うチームと小



バディを組んで踊りを教える



縦割りチームで踊りを教える

学校高学年及び中学部のリーダーが中心となってチームで教え合うチームとがあり、それぞれ自分たちの実態に合った方法で交流が行えるようにした。

#### ④スペイン語でのコミュニケーション

交流日までの期間、日本人学校の児童生徒同士で踊りを教え合う「模擬レクチャー」を何度も実施した。そこでは、バディ（踊りを知らない想定）を相手に踊りを教える練習を繰り返し、教えるときに必要だと感じた言葉を抽出させた。実際に約40個の必要な言葉が出され、それを現地採用教員の力を借りて実用的なスペイン語に翻訳した。新たに追加されたスペイン語は次時の授業前に確認、練習し、その都度一覧表にしてチームに配布した（右図）。

こんなスペイン語が分かったら教えやすい！		
1 あなただけで	solo usted	ソロ ウステッド
2 覚えて	recuerde	レクエルデ
3 座って	siéntese	シエンテセ
4 立って	de pie	デ ピエ
5 どのように	Como~	コモ
6 見て、マネして	Mire, y copielo, por favor	ミレ イ コピエロ ボルファボール
7 こっちに来て	venza aquí	ベンガ アキ
8 これを見て	mire esto	ミレ エスト
9 まっすぐ	directo	ディレクト

図 模擬レクチャーで抽出されたスペイン語一覧（一部）

### (3) 授業の振り返り

サン・アンソニースクールには、日本に興味関心がある児童生徒、または交流をすることが好きな児童生徒が多く、非常に友好的で前向きであった。現地校の子どもたちによさこいソーランを教える時間は実質40分程度しかなかったが、その短時間の中でもスペイン語（中には英語ができる児童生徒もおり、英語でコミュニケーションをとっている児童生徒もいた）を駆使して、混乱なく踊りを伝えることができていた。交流の最後には、全員でよさこいを踊り、録画した映像を視聴した。また、本番前に法被の紹介を行い、実際に法被を着用させることで、さらに気持ちを高めることができた。

交流の前後に日本人学校の児童生徒に対して「交流への興味関心」「バディの友達に教えることへの意識」「交流へのモチベーション（事後は満足度）」に対するアンケート調査を行い、その意識の変容を調べた。アンケートの結果、全ての項目において事後の得点が上がっており、また、自由記述の内容からも不安材料であったスペイン語でのコミュニケーションが円滑に行われ、どの子も楽しい交流の時間となったことが分かった。

以下に、児童生徒のアンケート回答（自由記述）を記す。

- はじめはスペイン語が心配だったけど、上手く話せたしやってよかったと思う。
- 最初はきんちょうしていたけど、じょうずに教えることができたのでよかったです。
- 前はどきどきしていたけど、ペアの子と想像以上に話ができてうれしかった。
- ペアの子に話が通じるか心配だったけど、ちゃんと通じたり仲良くなれて達成感いっぱい。
- はやくおどりを覚えてくれてうれしかった。覚えるのがすごくはやくてビックリ。最後はみんなでおどれてうれしかったしっこよかったです！
- 学んだスペイン語で自信をもって教えることができました。「わかったよ」とうなずいてくれるのはとてもうれしかったです。
- 自分はもう交流するきかいはないけど、楽しかったしうれしかったので、自分の子どもができたらかういう経験をさせてあげたいです。
- 英語も通じるバディだったので英語でコミュニケーションをはかりました。
- 今年度で僕の交流は終わりますが、この交流で学んだことを日本に帰っても生かしていきたいです。



最後は全員で法被を着て「よさこいソーラン」

## 5 おわりに

交流授業を実施するにあたって「言語の壁を少しでも取り除く工夫をすることによって、子どもたちは自信をもって交流に参加し、より充実した交流にすることができるだろう」という仮説のもと、授業実践を通して児童生徒の変容を見てきた。事前アンケートと事後アンケートによる意識の変容や、児童生徒の振り返りの記述から、子どもたちの意識が大きく進化したことが分かる。

それが、現地の児童生徒とコミュニケーションを図る際に、言葉が通じ、それによって最初の不安が取り除かれたことに起因するものだという事は間違いないと感じる。実際に、多くの児童生徒が「はじめはスペイン語が心配だったけど、上手く話せたりやってよかった」や「学んだスペイン語で自信をもって教えることができました。」「わかったよ」とうなずいてくれるのはとてもうれしかった」など、「言葉の壁」が取り除かれたことで自信がつき、交流を楽しむことができたという回答をしている。

「言葉の壁」を取り除く工夫のひとつとして実践した「模擬レクチャー」は教師側から与えるものではなく、自分自身の必要感から始まるため、子どもたちの主体的な学びにつながるものとして非常に有効であったと考える。また、自分が先生になって相手に教えることにより、説明する力やコミュニケーション能力はもちろんのこと、踊りのポイントを覚える理解力や技能面での向上も見られた。

この結果から、言葉が通じない、つまりコミュニケーションがうまくとれないという壁が予想以上に子どもたちの不安を煽るものとなっており、それを少しでも取り除けるよう工夫することが交流を充実させるためのひとつの条件であるということがわかった。これは、交流のみならず、どの授業のどの場面においても重要なことであり、同様のことが言えるのではないだろうか。本交流で行った授業づくりのちょっとした工夫を、他の場面にも当てはめ、児童生徒が円滑にコミュニケーションを図れるようにするためのさらなる実践ができたかと考える。

最後に、今回の交流を通じて、言葉の壁を乗り越え、充実した交流の時間を過ごした子どもたちが、今後、さらに異文化に興味をもち、またどこかの地で奇跡的に繋がり、思い出話に花を咲かせる…そんな素敵な日が訪れることに期待したい。